



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752

〈投稿〉

皆のマスク

ターニャ・コステリョフ

22年前に、来日して日本での生活の間に、2回も大きな悲劇のような出来事が日本に起きたことを目撃することになりました。一回目は、2011年の東日本大震災と福島第一原発の事故（以下「3・11」という）、2020年の新型コロナウイルスの拡大（以下コロナという）でした。どちらも、衝撃的であり、ニュースでたくさんの方の苦しみを見て、「これから大丈夫か」という心配もあり、戸惑っていました。

3・11の時も、コロナの時も、日本政府の対応の遅さに驚きを隠せません。他方、日本の国民のパワーに圧倒されました。地震・津波・原発事故に襲われたにもかかわらず、懸命に戦い、お互いに助け合い、復興のために頑張っていました個人個人のすばらしさでした。大変な時に助け合うことが、当然のように聞こえますが、実際は他国では、反対に災害時に店舗荒らし、空き巣などが起きる傾向があります。最近、米国でのデモのときもそのような犯罪が一気に増加してしまったことがその一例になります。

コロナの時も、いつこの問題が解決するかについては読めませんが、一斉にこの見えない敵を迎える人々の精神はうらやましく思っています。

4月・5月にコロナウイルス感染が広がっているにもかかわらず、日本人はマスク不足に悩まされました。東京で、ソ連時代末期のようにあちこちで長い列が見られました。さびしい風景でしたが、少し懐かしくも思えました。

政府から送られてきた1家族あたりマスク2枚という「安倍のマスク」という現象について、ロシア人コミュニ

ニティの中でも、カリカチュアから始め、様々なジョークが流行っていました。（例えば、安倍のマスクを使わず保管すれば、コロナ時代のシンボルとしてヴィンテージになり、将来、高く売れるじゃないか、などなど。）

現在、コロナウイルスに立ち向かう人々、中小企業の力と創造力に感動しています。企業は洗えるマスクを開発・製造し国民と日本在住の外国人のニーズに答えています。その洗えるマスクの素材、機能、タイプが様々で、自分に合っているタイプをすぐに見つけることができます。

一方、日本の女性はすぐに手作りのマスクを作り始め、インターネットで作り方などがアップされていました。また、形、タイプ、柄を考え、自分でデザインすることにより一つだけのオリジナルなものになります。他の国でほとんど見られない傾向です。しかし、ロシア人女性も手芸が好きな人が多いので、すぐに、その流行に乗りました。マスクデザインのコンテストも開かれたようです。コンテストで、マスクの芸術性と機能性を競いました。芸術の面では、ロシア風のモチーフ（マトリョーシカ、バラライカ、白樺など）を含んだ模様から始め、モダンな現代アート風のものまでありました。プロのデザイナー、アマチュア、一般人、誰でも参加は可能でした。また次回、このようなコンテストが開かれる場合、参加したいと思います。この流行にあわせて、ロシア人のお母さんたちは子供用・大人用の特殊なデザインのマスクを作りはじめました。インターネット上のロシア人コミュニティの間、直ぐにシェアし始めましたので、マスク不足の時期から今までに、自分で作れない人も、オリジナルマスクが手に入ります。

ロシアの文化では、一般的にマスクを着けて外を歩くことがないので、いざという時に付けたら、恥ずかしく感じています。今回のロシアでコロナウイルスの感染が広がっていても、ロシアの人は、マスクを付けるのを嫌がって、マスク義務付けの規制が外れたら、すぐにほとんどの人がマスクを止めてしまいました。しかし、日本在住のロシア人は、トレンドに合わせてきちんとマスクをし、恥ずかしいこととして考えなくなりました。私自身も、マスクをすることに慣れ、恥ずかしい気持ちがなくなりました。

コロナに立ち向かう際に、かわいい・かっこいい・おもしろいマスクの新しい文化ができたことによって、少しでも気が楽になるとよいかと思っています。

もちろん、一日も早くコロナが収束することを願っています。

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org

Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

お知らせ

●第70回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2020年9月6日 (日) 13:30~16:00

場所: 田町リーブラ2階、造形表現室

会費: 3,000円 (お好きな教材1セット含む)

講師: 菅野エレナ

●ロシア語クラス再開

7月から事務所での対面クラスも再開しております。

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、冷房による熱中症、感染の予防にご協力お願いいたします。

オンラインクラスも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン教師陣が皆様をお迎えいたします。
コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)、オクサーナ・ピスクノワ

●テーマ別ロシア語 「おもてなしロシア語」3

日時: 2020年8月30日、9月6日、20日 (日) 13:30~16:00

講師: オクサーナ・ピスクノワ

授業料: 会員7,000円 一般8,000円

《モスクワ・アラカルト60》

コロナの熱い夏2020

日向寺 康雄

コロナと炎暑の異常な夏は、ようやく峠を越しつつあるが、ロシアでも、感染者数の伸びは鈍化する傾向にあるようだ。8月23日の段階で感染者数は95万人と100万人に迫り世界第4位、これだけ見ると驚くが、うち77万人はすでに回復、死者は1万6千人と、英国やイタリア、フランス、スペインに比べずっと少ない。また同日マントゥーロフ産業貿易相は、世界中で話題になっている新ワクチン『スプートニクV』について言及し「年末までに3つの企業が、月およそ150万から200万回分の生産を開始する。徐々に月600万回分に拡大できるだろう」と伝えた。ただ全ロシア世論調査センターによれば「ワクチン接種に肯定的な人達の割合は42%に過ぎず、半数以上の52%が自分は接種するつもりはない」と答えたという。

このようにコロナをめぐる情勢の今後について、ロシアの人々は、まだまだ楽観していない。一方モスクワでも23日、一昼夜の感染者数が611人と、このひと月間で最低となった。又このところ涼しくなり秋の気配が立ち込めているが、今後2週間、暖かさの揺り戻しがあるとの予報だ。市民生活も、ゆっくり元へ戻りつつある。公共施設・交通機関を利用する場合、マスクや手袋の着用が必須とされているが、すでに公園は開放され、人数制限はあるものの美術館や展示場、動物園へはEチケットで入場でき、スポーツ観戦も条件付きで可(スタンド観客10%未満)、カフェやレストラン、バーなども営業している。幼稚園も開かれた。プールやサウナ、フィットネスクラブも利用できる。夏の風物詩モスクワ川の遊覧船も復活した。そして新しい劇場シーズンの幕開けも、もうすぐだ。リュヴィーモワ文化相の説明では「劇場は制限措置が解除されたのち9月に開かれる。ただチケットは、チェ

ス盤のように偶数列は奇数席、奇数列は偶数席のみが販売されるため、観客席は通常に比べ、はるかに少なくなる」との事だ。



今日は最後に、ポップグループCreamSodaとビデオブローガー3名によるコメディラップトリオХ ЛЕБ (フレーブ、パンの意)のコラボ作品「Плачу на техно (テクノで泣いて)」を御紹介したい。ステイホームで外に出られず、自分達のアパートのベランダで踊るモスクワっ子の姿をユーモラスなMVにして、これが大ヒット、ロシアのヒットチャートTOP20で7回も一位となった曲だ。歌の内容は次の通り「主人公の女の子は夜、どうしても眠れず、テクノを踊りにライブハウスに行く。そこはかつて彼氏と出会った所。でも1年前と同じバンズのスニーカーを履いた彼氏の隣には、ナイキを履いた見知らぬ女の子。そしてバンズとナイキのスニーカーは、彼女もよく知るイカしたダンス・ステップを仲良く踏んでいる。彼女は心の中で叫ぶ—あんたは私だけのものだったのに！でもほとんど涙は出ないよ、だってあたしの涙は、レイヴを踊って流れるんだから…」モスクワっ子はコロナ禍の中でも、楽しくしたたかにたくましく生きています。

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大、早大非常勤講師)

<https://www.youtube.com/watch?v=L1Snj1Pt-Hs>

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

留学生ナジロフ・ノジマさんが、この8月7日、チャーター便で帰国しました。この「ウズベキスタン便り」にも何回か登場したノジマさんは、5年間の留学生活中、まさにリシタン市のローカルアンバサダーのような役割をも果たしました。「NORIKO学級校長ナジロフ・ガニシエル氏の長女」という立場が、おのずと、そうさせていたのかもしれない。

ノジマさんは、3歳のときに初めて大崎重勝さんを通して日本語を知りました。子ども達の「大崎おじさん、リシタンに日本語学校があったらいいのになあ」との熱意に応え、大崎さんは、奥様・紀子さんの同意を得、退職金の一部を投入、ガニシエル氏の土地にNORIKO学級を創ります。1999年11月29日が創立記念日です。2002年以降、毎年10名前後のボランティアが、バトンを繋いでいきます。2005年、大崎さん他界と時を同じくして、「地球の歩き方」にNORIKO学級が掲載され始め、2008年、ロシア旅行社企画の「学生ボランティアツアー」が開始されます。メジャー媒体の力は大きく、毎年50名前後の若者が学級を訪問するようになりました。すると、「ノジマちゃんを将来お嫁さんにしたい」と言うファンが続出したのです。中庭をぐるりと囲んで親類縁者が暮らし、三世代・四世代同居が当たり前の地元では、助け合いやケアの精神が根付いています。ノジマさんにとって当たり前の振る舞いが、現代の日本の若者には、新鮮で魅力的な行為に映ったようでした。

2014年、首都タシケントで開かれたJICA主催「第22回日本語弁論大会」優勝を手土産に、ノジマさんは来日します。日本語能力検定N1の日本語力を駆使し、毎年開かれる「世田谷海外研修者の会」主催交流イベントではスタッフとして、都立高校では講師、舞鶴市とNORIKO学級との交

流促進時には通訳、CoC出版「世界の朝ごはん」ではウズベク料理家として、八面六臂の活躍をしています。リシタンの小さな日本語学校から、彼女のようなアンバサダーが自然に生まれたことを、今、改めて、誇りに思います。

ホストファミリーとして、彼女を支えた後藤三加子先生(小学校教諭)の元には、彼女の帰国時の様子が、家族との写真と共に送信されてきました。チャーター機は、8月7日夜にタシケント国際空港に到着。「日本からの帰国者は問題がない」との判断で、隔離生活は避けられましたが、自発的に新型コロナウィルス検査を受け、12日に安心してリシタンの自宅に戻ったとのことでした。自宅での写真には、パパ、ママと一緒に微笑む甥御さんを抱いたノジマさんが写っています。5年ぶりに家族本来の立場に戻ったわけです。

日本での体験を大きな糧に、未来に向かって歩み始めるノジマさんから、きっと楽しい「ウズベキスタン便り」が届くことを期待したいと思います。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)



ロシアの飛び地カリーニングラード

畔上 明

一年前に逝去されたドイツ文学者池内紀氏の紀行エッセイ「消えた国 追われた人々」は、700年という長い歴史を歩んできた東プロシアについての認識を新たにしてくれます。東プロシアの首都であったケーニヒスベルクは、第二次世界大戦終結のポツダム宣言によってソ連領となり、当時の最高会議幹部会議長の名前を取ってカリーニングラードと改称されたロシアの飛び地です。こうした辺境に於ける複雑な歴史、民族と文化の変遷を知ること、どこやらの政治家がナイーブに単一民族信仰を口にするのとは違い、複眼でものを観る力を養ってくれます。

2001年にロシア旅行をした時の仲間と結束を深め翌年はバルト3国を旅しようと計画したのが、奇遇にも池内氏がこの消え去った国の跡を旅した2002年から08年であったと今から思えば重なる時期だったのです。フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニアを巡り、カウナスの杉原千畝記念館、更に音楽家であり画家であるチェルリョーニス美術館を見学した先、旅程は欲張ってリトアニアのクライペーダ（ドイツ名メーメル）、ロシアの飛び地カリーニングラード、そしてポーランドのグダンスク（ドイツ名ダンツィヒ）へと陸路で繋いでいきました。

トロイ遺跡を発掘したことで知られるシュリーマンは若い頃オランダの貿易商社のサント・ペテルブルク支店長としてロシアで働きクリミア戦争中莫大な財産を築くこととなりますがその礎となったのがメーメル港です。現在クライペーダと呼ばれるそのドイツ風の街並み



を北上しバルト海の岸边までやっていると、目と鼻の先に細長い半島が延びています。地図を開けばまるで細く長い糸の様な半島の先がクライペーダにくっつかんばかり、私たちの乗車していたリトアニアの観光バスはそのままフェリーに乗り込み5分とはかからず対岸に到着。地図上は頼りなさげな細い線の「クルシュ砂洲」、実際は長さ98kmのユネスコの世界遺産、北半分52kmがリトアニア領、砂洲の途中にロシアとの国境が引かれ、カリーニングラード州に入り込むことになります。13世紀にドイツ騎士団などによってキリスト教が持込まれるまでは多神教の異教の世界であったことを思い起こさ

せる「魔女の丘」、ニダに建つ1930年代のトーマス・マンの別荘、1965年にサルトル、ボーボワールが過ごした砂丘、そうしたクルシュ砂洲の中を散策していれば自然とロシア国境を越えられるのではないかと想えるほどですが、林をくぐり抜けた自然の中に国境ゲートはしっかりと築かれていて、特に大型車の検問ゲートは大行列、その渋滞の為半日掛りの国境通過となりました。

現在ドイツ人は全くいなくなってしまったことで風化しつつあるドイツ的建築群とソヴィエト時代の建築の混在、数学者オイラーによる一筆書きの理論を生み出した当時の七つの橋を想い描き、ケーニヒスベルクで終生を過ごしたカントの墓と大聖堂内のカント博物館を見学することでその「永久平和」確立を考察した哲学者の眼差しが強く感じられ、かつての美しい都市が混迷を深めゆく景観へと変貌した中、超然としたカントの姿勢が示されるのです。（「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー）

便利になるロシア：コロナ騒動下のモスクワ（2）

西山 美久

新型コロナウイルス感染拡大に伴う外出制限がモスクワで導入され2ヶ月以上が経過した。6月に入り新規感染者が減少し始め、そろそろ制限が解除されるのではと思っていたところ、6月8日にソビヤニン・モスクワ市長が翌日6月9日から外出制限措置を解除するとともに、電子通行証を廃止すると発表した。自宅「軟禁」生活からついに解放されることになったのである。もっとも、公共交通機関や市内のスーパー等では、マスクや手袋の着用が依然として推奨されている。

振り返ってみると、新型コロナウイルスの影響で仕事はテレワーク体制に移行したし、カフェやレストラン等が休業状態だったので外出する機会は急激に減り、自宅の中で過ごす日々が続いた。食品や日用品等は近所のスーパーの他、インターネットでも購入できたので普段の生活で困ることはあまりなかった。とは言え、2ヶ月以上に及ぶ自宅「軟禁」生活が続いたおかげで若干ストレスを感じていた。そうした中、外出制限が解除されて自由に散歩できるようになり、また6月下旬からはカフェやレストラン等の営業が再開されたので、早速知人と外食することにした。あるレストランでは入口で除菌ハnadスプレーでの消毒や検温で感染対策を施し、店員はマスクと手袋を着用し接客していた。少しずつではあるが、以前の活気を取り戻しつつあるように感じた。

さて、新型コロナウイルスの感染拡大によりモスクワ市内のアパートの家賃が下がると聞き、せっかくなので新しい住居を探すことにした。インターネットで検索してみると、立地や間取りが理想的で普段であれば手の届かない物件も、コロナの影響で家賃が思いのほか下がっており、この際なので引っ越しを決意した。複数の物件を見て回り、最終的にはモスクワの南部に位置するアパートを借りることにした。幸い、外出制限が解除され、電子通行証も不要なので引っ越しは問題なくできた。意外にもコロナのおかげで良い物件に巡り合えたわけだ。

7月に入り感染者が全国的に減少傾向にあるとはいえ、それでもモスクワ市では約650人の新規感染者が確認されている。また、第二波の可能性も危惧されており、今後どうなるのか分からないが、とりあえず感染予防のためにマスクを着用して外出する他、こまめに手を洗うことを心掛けている。なお、制限が緩和され外出する機会が増えたのは幸いだが、モスクワの夏は非常に暑くマスクを着けると息苦しい。鼻を出してマスクを着けることも考えたが、やはり健康が一番なので、外出の際には正しくマスクを着けるようにしている。新型コロナウイルスが一日でも早く落ち着くことを願っている。（北海道大学）

第二次世界大戦中のソ連からの秘密ラジオ放送の一つに、「幽霊の声」という名前の放送があった。41年中頃から44年にかけて断発的に行われていたものである。

この放送は、モスクワのシャボロフカ通りのスタジオから、モスクワ放送の中波・長波の送信電波を利用し、ドイツ国内のドイツ語の放送の周波数に合わせ、送信出力を短期間に増強し、指向性アンテナをドイツに向けて行われていた。生放送のみ。放送時間は任意、確固たる番組構成はない。

ラジオ放送は普通、開始アナウンスがあり、番組内容があり、終了アナウンスがあって、放送が終了する。だが、「幽霊の声」放送は、ナチス・ドイツの放送局のドイツ語放送を、騒がしい騒音を立てることによって完全に聞こえないようにするか、または野次を飛ばすことによってコメントを挟み込んだ。ナチス・ドイツの放送のニュースを「ナチの嘘」と呼び、「ヒトラーには平和はない」、「ドイツが目覚めた！ヒトラーは無駄だった」というスローガンを放送中に叫んだ。放送進行中のドイツのラジオ番組での挟み込みによって、ドイツ国内の聴取者を怖がらせ、聴取者に赤軍が決定的な勝利を遂げようとしていることを示唆することがこの放送の目的だった。「幽霊の声」放送に対する組織的な妨害は不可能だった。なぜなら妨害しようとすれば、ナチス・ドイツは自分たちのドイツ語放送を妨害することになるからである。このように「幽霊の声」放送は本来の放送の形と

は全く異なっていたのである。

「幽霊の声」放送は、モスクワ放送を統括するラジオ委員会と労農赤軍政治総本部第7局の委任により、モスクワにいたオーストリア共産党員（その背後にコミンテルン）の提案と主導によって行われていた。つまりソ連国家の後押しでこのような挟み込み放送が行われていたのだ。しかもソ連側の事前検閲は全くなかった。

ピューター著『「第三帝国」に対する放送』によれば、「幽霊の声」放送はドイツ国内の北部と東部で特に人気が高かったが、ナチスによってたきつけられたロシア人に対するドイツ人の恐れを、減ずるというよりもむしろ増す傾向にあったという。また「幽霊の声」放送のコメントは国際報道で頻繁に言及された。

コミンテルンが主導したこのような挟み込み放送は、ドイツ語放送だけに限らない。ディミトロフはその日記（41年8月1日）に、「ドイツとオーストリアからのラジオ放送に（その周波数で）野次と短い言葉を差し挟むことで、私たちのアナウンサーがフェードインされることを組織した」と記し、さらに「フルンベルクは、特別な『ラジオ・キャンペーン』がドイツの放送局『プレスラウ』の周波数で現在実施されていることを報告した。成功は目覚ましいものである。クリミアでのイタリア語放送の準備が行われている」（9月8日）と、イタリア語での挟み込み放送の実現を示唆している。まさに「ラジオ・プロパガンダ」そのものといえよう。

モスクワ「ムゼイ」巡り・その22

銃兵隊博物館

Музей Московских стрелцов «Стрелецкие палаты»

大矢 温

今回はモスクワの観光名所、トレチャコフ美術館の目と鼻の先にありながらあまり知られていない「銃兵隊の館」をご紹介します。ご存じ、トレチャコフ美術館の真正面には灰色の巨大な建物がそびえ立っている。これはB. パステルナークやM. ブルガーコフなどソ連を代表する作家たちが住んでいた「作家の家」だ。「作家の家」については、別の機会に触れるとして、今回は「銃兵隊の館」。この「作家の家」の中庭にある。見知らぬ建物の中庭に入っていくには多少勇気が必要だが、入り口のゲートをくぐればソ連時代の建物に囲まれて2階建ての17世紀の石造建築がひっそり建っているの一目瞭然。迷いようがない。

「銃兵隊」とは、マスケット銃で武装した中世の皇帝直属の親衛隊で、外敵との戦争やモスクワ市内の警備に活躍した。マスケット銃は銃口から火薬とともに丸玉を込めて発射する原始的な銃だが、中世のヨーロッパでは強力な武器として広く使われた。特にたびたび南方からの敵襲にさらされていた中世のモスクワは、モスクワ川対岸地区に銃兵隊を配備して守りを固める必要に迫られた。17世紀になると銃兵隊長のC. チトフの一族が現在の場所に所領を賜り、館を建てた。これが現在の「銃兵隊の館」。

建物自体は何度も増改築が繰り返されているが、石灰岩の分厚い壁やドームに支えられた天井、外側のレリーフなど、中世ロシアの石造建築の特徴が、よく残っている。建物自体も見応えがあるが、展示物もまた、銃兵隊が使った武器や装備、モンゴル人との戦いのジオラマなど、なかなか見応えがある。実物を手にしてマスケット銃の取り扱いを体験するコーナーもあるので子供連れで

も楽しめる。小一時間もあれば一通り見て回れる小さな博物館なので、トレチャコフ美術館のついでにでも、ぜひ立ち寄っていただきたい。（札幌大学地域創創群教授）

入場料は大人400ルーブリ、月曜休館日

最寄駅は地下鉄 トレチャコフスカヤ

Москва, Лаврушинский переулок, дом 17, строение 1



お知らせ

江守元彦副会長より、貴重な歴史的資料を提供していただきました。昭和45年6月編集発行/インデギルカ号遭難者の慰霊碑を立てる会「秘められた惨事—インデギルカ号の最期」：昭和14年当時の漁民、神源一郎をはじめ当時の目撃者、関係者の記憶及び警察の資料を基に、インデギルカ号の遭難の記録がよみがえる。

資料をご希望の方は事務所までご連絡ください。ご郵送いたします。